

1

次の文章を読んで、①～⑦に答えなさい。

書物を読む人が減ったとのこと。ほんとかなと思っていたが、実態をいろいろ聞いてみると、どうもほんとうらしい。読書は実にオモシロイのにならしてかな、と不思議に思う。要は、インターネットがサカんになって、自分の欲しい情報がすぐ手に入るの、それが普及するにつれて、読書する人が急に減少していったとのこと。

インターネットなど便利なことは、どんどん利用すればいい。しかし、だからと言って読書しない、というのが私にはわからない。これは意味がまったく異なるのだ。たとえば、ある人について、その学歴、ギョウセキ、交友関係、その他いろいろなことを調べることがができる。詳しく知れたら、たくさんのことがわかるだろう。あまり一般の人の知らないことまでわかるかも知れない。しかし、その人に直接に会って、話し合うというのは、まったく違うはずだ。短時間でも、その人に直接に接するということは、その人についての「情報」を得る、というのと明確に異なる体験である。

本を端から端まで読む、というのは、生きた人に会うのと同じようなものだ。これは必ずしもその本の著者に会うということの意味じゃない。一冊の本自体が一種の人格をもっている気がする。しかし、それを感じるためには、端から端まで読まないで駄目なのだ。

中国文学者の吉川幸次郎先生が、アメリカの大学で、大学院生と中国の歴史書を講読することをされた。アメリカの学生は先生にすぐ質問して、中国の歴史書は、大事なことやつまらぬ些細なことを平気で並べて書いているが、この本のどこどこを読むと、この歴史書のエッセンスがわかるのか、と尋ねた。

それに対する先生の答は、そんな態度でこの本を読んでも、中国の歴史は全然わからない。あなたが重要とか些細とか勝手に思っていることを、丹念に端から端まで読んで、読み終わったときに、自分が感じ取ったこと、それが「歴史」なのだ、ということだった。つまみ喰いでは、「歴史」はわからないのだ。

私はこの話が大好きである。鳥の鳴いたのも皇帝が死んだのも同列に書いてあるのを、じっくり読んで、読み終わったときに腹に感じる「歴史」は、その人の生きる上において、意味をもってくるだろう。

こんなわけだから、私は本を読む速度も早くないし、読む冊数も少ない。それでも、案外、学者として通用する——と自分で思っているだけだという声も聞かせるが——のは、読んだことが自分のものになっているし、それから自分勝手にいろいろ発想することが多いからだろうと思う。

この忙しいときに、何を呑気な、という人もあろう。私は、むしろ忙しいからこそ、こんなことが必要だと思う。忙しい忙しさと走りまわっているときは、何だか「活躍」しているような錯覚に陥るが、おと気がついてみると、自分という人間はどこかに消え失せて、ロボットのようにな動かされているときが多い。

その点で言えば、ゆっくりと本と向き合っているときは、確かに「自分の」時間だと感じる。必要な情報を得るためではなく、ともかく端から端まで読むのだから、何だか無駄なようなところもあるが、それが面白いのである。吉川先生の言われるように、全体のなから浮かびあがってくるものが感じられると、ほんとうに嬉しい。

(出典 河合隼雄「本を端から端まで読もう」)

- ① ———の部分⑦、⑧を漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 「れる」の助動詞の意味は、(1)～(4)のうちのどれですか。
 - (1) 受身 (2) 可能 (3) 尊敬 (4) 自発
- ③ ———④の中の「忙」は形声文字で、もともと二つの漢字(文字)が組み合わさってできたものだが、その同じ二つの漢字を組み合わせてできる、「忙」とは別の漢字一字を書きなさい。
- ④ 「短時間でも……体験である」とあるが、どういう点が異なるかと

考えられるか。その説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 情報だけでは相手に関する客観的な事実しかわからないが、直接会うと相手の心情まで理解することができるという点。
- (2) 情報だけで相手をひととおり理解することは可能だが、直接会うとより深く相手の人間性を知ることができるという点。
- (3) 相手の情報は自分の知りたい部分を選んで手に入れられるが、直接会うと相手の全人格に触れざるをえないという点。
- (4) 相手の情報はその気になればすぐ調べることができるが、直接会おうとすると時間も手間もかかってしまうという点。

⑤ 「つまみ喰いでは、『歴史』はわからないのだ」とはどういうことか。それを説明した次の文の①、②、③に入る適当なことばを、文章中からそれぞれ漢字二字で抜き出して書きなさい。

「歴史」は、書物の中から、自分が「①だ。」と「②」に判断したことだけを拾い上げて読むような態度では理解できない、ということ。

⑥ 「何だか『活躍』しているような錯覚に陥る」の説明として、最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 本当は、自分の意志でなく必要に迫られて動かされているのに、自分が主体的、意欲的にがんばっていると思ってしまうこと。
- (2) 本当は、多くの仕事をこなそうと走り回るのはみっともないことなのに、自分が有能な人間のように思ってしまうこと。
- (3) 本当は、どんなときにも重要なことだけを選んですべきなのに、与えられた仕事を能率的にこなすことで満足してしまうこと。
- (4) 本当は、一つのことを打ち込まなければ成果は上がらないのに、多くのことをこなすだけで充実感を味わってしまうこと。

⑦ 読書についての筆者の考えを、九十字以内でまとめて書きなさい。

2

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りてゆくもかし。雨など降るもかし。

清少納言に夏の特色を問えば、上記の答え(『枕草子』)が返ってくるに相違ない。夜のありがたみを痛感するのは、シキのなかでも涼を運んでくる夏であるうし、それに月でもあれば言うことなし。しかし、闇夜でも蛍が飛んでいれば趣がある。また、暑い夏に一雨あれば救われた感じになる。多くの人が夏に寄せる感慨であろう。

ただ当時と、われわれが身を置く今日とでは生活環境があまりにもかけ離れてしまっているので、この一節を体験するのは困難だ。まず、冷暖房の生活に慣れきっているぶん、自然体で暑さ寒さを感じるものが鈍くなっている。時代は下るが、『徒然草』に「家の作りやうは、①をむねとすべし。②はいかなる所にも住まる。暑き比、わるき住居は堪へ難きことなり。」とあるから、往時の人にとって

③よりも④がこたえたようだ。照明についても隔世の感がある。とりわけ都会において顕著であり、よほど田舎へでも行かないと当時の暗さを体験できない。それ故に星空の美しさの相違も大きい。子供のころ疎開先の小川で光を頼りに蛍を追いかけた記憶があり、その場所や友のことなどはわすれてしまったが、蛍がハナツ明るさだけは鮮やかに覚えていて。その蛍も、今では農薬などの影響で激減している。観賞どころではない。終日で最も涼しいのに夏の夜は短い。そのことを意識してかどうかはわからないが、百人一首に採られている、

月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる 深養父
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいつこに月やどるらむ 古今和歌集(夏)

などには短い夏の夜を惜しむ気持ちが込められているよう。深養父は清原姓で清少納言にとっては曾祖父に当たる。(出典 龐谷寿「源氏物語の風景」)

